＜真鶴町視察レポート＞

「美の基準」と民間主導のまちづくりについて

2019 年 6 月 19 日（水）視察スケジュール

11 時　真鶴町役場訪問・活動ご紹介（ト部氏）

12 時　ランチ

13 時～17 時　真鶴町内ご案内（森脇氏、ト部氏）

17 時過ぎ終了

参加者： 青江整一氏、天久和則氏、竹下和宏氏

枝廣淳子、館岡景子

有限会社イーズ,2019 年 8 月 16 日

目次

１．訪問先……3
２．真鶴町　概要 ……3
３．真鶴町　歴史・文化 ……5
４．真鶴の魅力……7
５．美の基準 ……7
5.1 内容……7
5.2 作業と協議 …… 10
６．真鶴の課題（過疎地域指定と少子高齢化） …… 11
７．真鶴町活性化プロジェクト（官民連携） …… 14
８．町民による「新しい人の流れ」づくり：芸術祭　真鶴まちなーれ…… 20
９．真鶴町の地方創生の柱（真鶴町総合戦略基本目標） …… 21
10.次々と町民事業が生まれている理由～リーン・スタートアップ …… 28
10.1.「人が人を呼ぶ」つながりと化学反応 …… 30
11．まとめ…… 31
12．視察時のようす …… 32

1． 訪問先

- 森脇 理好氏

真鶴町 政策課 課長

1962 年島根県松江市生まれ。250 年続いた家業がバブル崩壊で倒産、1989 年祖父の代から親交のあった衆議院議員の地元秘書に。1995 年より参議院議員国会事務所、2001 年より政策秘書。2007 年の参議院選挙で自民党が大敗し、永田町を去る。国会事務所時代から応援していた地域振興で頑張る島根県海士町の東京サテライトオフィス設置により参与として駐在。2014 年から海士町の取組をはじめ、これまでの人脈や政策について、真鶴町若手職員による活性化チームの応援・助言等、現真鶴町長の依頼から真鶴町へ通いはじめ 2015 年から本格的に始まった地方創生事業の創生事業調整専門員として出向。2018 年創生事業始め事業加速化の為機構改革で設置された政策課へ課長として就任要請から完全移籍し現在に至る。

- 卜部 直也氏

真鶴町 政策課 戦略推進係長

1972 年生まれ。学生時代に美の条例に出会い真鶴町の生き方に惹かれ、2000 年に真鶴町に移住、町役場に入庁。都市計画課・まちづくり課にて美の条例の運用を 10 年間担当。企画調整課を経て、地方創生や移住推進、企業の CSR 活動と連携した公民連携プロジェクト、芸術文化事業の支援等を推進。現在は新設された政策課にて事業を引き継ぎ、様々な町民事業と連携しながら真鶴町の地域づくりに取り組む。真鶴町民としても、港町の暮らしを満喫中。

2． 真鶴町　概要

神奈川県最西部に位置し、東に小田原市、北に箱根町、西に湯河原と、3 大観光地に囲まれた町。東京からのアクセスは東海道線で約 90 分、都心への交通の便も比較的よい立地場所。

- **面積と人口**

真鶴町の面積は 7.05 キロ平方メートル。県下 2 番目に小さく、箱根町の芦ノ湖に入ってしまうくらいの小さな町。人口は高度経済成長期の 1 万人をピークに微減傾向（原因は少子高齢化と社会減）。現在 7,300 人弱（男性 3,400 人、女性 3,800 人）、世帯数は 3,400 余り。

- **地形と自然**

起伏に富んだ坂の町（勾配 10%）という特徴がある。平坦な可住地面積は県下で一番小さい町（つまり、ほぼすべてが坂）。自然は豊富で、半島尖端のこんもりとした緑と山間部の緑、そして海と両方が楽しめる町。

- **産業**

１次産業：漁業と農業

✧ **漁業:** 真鶴半島は相模湾の西に位置しており、美味しい魚が獲れる事で有名な駿河湾、富山湾と共に日本 3 大急深の湾と称されている。魚が傷みにくい定置網漁を主力としている。

✧ **農業：**斜面地のため、日当たりが良く、柑橘系のミカン農業が多く営まれてきた。

✧ **石材業：**香川県の「庵治石」、茨城県の「稲田石」に並ぶ日本三大名石の 1 つとされる「本小松石」の産地。箱根火山のカルデラ形成期に、この地域で噴出した単成火山の溶岩が連なって形成され、真鶴の山側で採掘されている。本小松石は真鶴でしか採掘されない良質な石材として墓石や銘石に使われ、天皇家や歌手の美空ひばりのお墓にも使われる高級な石。神奈川県の石材組合＝真鶴であり、県では唯一ここだけにある。また、墓石の需要も減っていることから、石の彫刻祭を開催し、「石の町・真鶴」のリ・ブランディングを通して、アートによる産業再生にも着手している。

そのほか、岬や港を中心民宿・旅館等の観光業が営まれている。

- **真鶴港と岩漁港**

真鶴駅を下り切った所に真鶴港、東に岩漁港がある。真鶴町は 1956 年に旧真鶴町と旧岩村という 1 町 1 村が合併してできた町で、その名残で 2 つの港、2 つの漁港がある。

3．真鶴町　歴史・文化

- **魚つき保安林「お林」**

江戸の大火で木材が大量に必要になったことから、幕命により、萱原だった真鶴半島に 15 万本のマツ苗が植林された。明治維新後に、ここは皇室所有の森林（御料林）となり、マツ林は見回り人により大切に保護されてきた。そして明治 37 年 森林法に基づく「魚つき保安林」に指定される。「魚つき保安林」とは、魚群誘致や漁場保全の目的で植林、または育成・保全されてきた森林こと。今でも魚を育てる森として地元の人々や漁師達に大切に守られている。昭和 22 年に御料林は国有林となり、その後、マツだけではなくクスノキやスダジイなどの巨木が生い茂る混交林となり、県立自然公園特別地域や「真鶴半島の照葉樹林」として県の天然記念物にも指定されるようになった。「魚つき保安林」は、真鶴町漁業を支える大きな役割を担いながら、真鶴町の神聖なる場所として大切に守られてきており、年の初めの初漁では山の

神様に出向いて、安全祈願、豊漁祈願をしている。町民からはこの地域を畏敬の念と愛着を込めて「お林 (御林)」と呼ばれている。

（参考）

一方で、この森林が今、松くい虫の被害で倒木が進んでいる。昭和 40 年代位から全国的に「松くい虫」の被害が顕著となり、お林への被害拡大を防ぐための保護活動に努めてきたが、その後、財源課題に直面し、20 年間ほど何もできない状態が続いていたが、2004 年、KDDI をはじめとする民間企業や大学や団体による保全支援がスタートした。

○江戸時代から続く森林資源の保全を目的に立ち上がった産官学連携プロジェクト
KDDI のタブレットやソリューションを活用して「魚つき保安林」の植生調査を実施
https://www.kddi.com/corporate/regional-initiative/case04/

○"魚つき保安林"を活用し、真鶴町の活性化につなげる産官学連携プロジェクト『真鶴スマート魚つき林』開始
http://news.kddi.com/kddi/corporate/newsrelease/2015/03/25/1021.html

保全内容は、技術やプロモーション、そして社員ボランティアによるお林保全調査等、幅広いプロジェクトとなっている。

具体的には KDDI のタブレットを保全調査用に専用にカスタマイズしてもらい、「お林」の植生調査を実施した。タブレット内には真鶴の「お林」の樹種が全て設定されており、樹木や樹種とか周囲の長さなどの数字を入力すると、瞬時にクラウド上でエクセルに入力されるシステムを開発。紙で調査していた時と比べ、クラウドでデータ管理・集計時間が圧倒的に短縮され、また、天候に左右されることなく調査ができている。誰でもが使える仕組みのため、町民自身がタブレットを活用し「お林」を守っていくことを可能にした。また、KDDI 社員がボランティア研修の一環で、植生調査に関わった。

- **伝統行事：貴船まつり**（国の重要無形民俗文化財に指定、日本三大船祭りのひとつ：旧真鶴町）

http://www.town.manazuru.kanagawa.jp/juyo/1239.html

300 年以上の歴史があり、貴船神社のご神体を神輿に乗せ、台船で港を渡り（海上渡御）、町内を豊漁・無病息災を祈願しながら巡行するお祭り。日程は毎年 7 月 27、28 日の 2 日間（日にちを変えると重要無形民俗文化財の指定から外れてしまうため、この日に決まっている）。地域の絆が色濃く残っている祭りであり、東京に出ていった若者も、この日は真鶴に帰ってくる。

- **伝統行事：児子（ちご）神社例大祭（旧岩村）**

大きな笠で象徴される花山車と神輿がぶつかる喧嘩祭で、7 月の第 2 日曜に行われる。岩の住民の方々は、祭りと言えば貴船祭りではなく、児子だという。

４． 真鶴の魅力

祭りという伝統行事が残る町、首都圏最大級の「魚つき保安林」がある町、石材や漁業という地場産業が息づく町、食に恵まれている町。そして、景観づくりで世界とつながり、「美の町」とも呼ばれている。

（真鶴の魅力について　卜部氏）

真鶴が「美の町」と聞き、当初は京都や飛騨高山のような様式美のことを妄想していたが、駅を降りてみると、伝統的な建造物もなく、かといって格好いいモダン建築もない、普通のひなびた漁村の風景が広がる町だった。何が「美」なのか、それは、人々の生活風景が「美しい」ということがわかった。そのことを日本中がバブル経済に浮かれていた時期に言い切っていたのが、「美の基準」のすごいところでもある。

５． 美の基準

5.1 内容

「美の基準」とは、1994 年に施行された「真鶴町まちづくり条例」の一つで、小さな町の景観づくりを具現化するルールとして作られたもの。

内容は、アメリカの建築家・都市計画家のクリストファー・アレグザンダーが著した『パタン・ランゲージー環境設計の手法』を参考に、また、イギリスのチャールズ皇太子による著書『英国の未来像－建築に関する考察』の中で提唱された「美の 10 原則」から引用し、策定された。策定には、弁護士である五十嵐氏を筆頭に、建築家の池上氏、都市プランナー野口氏の 3 人が関わり、2 年がかりで「美の条例素案」を作っていった。

役所の本というよりも絵本のような見た目で、文章も文学調になっている。条例の施行規則に基づいたデザインコードとなっているが、従来の行政作法とは大きく異なり、特定の様式美・デザインや数値基準ではなく、定性的な表現で真鶴らしさを謳った内容になっている。

例えば、「高さ制限 10m」とは言わずに、「見付けの高さ」という言葉を使う。「見た目の高さを抑えてください」という意味で、抽象的な表現で景観基準をうたっている。

実際にこの「美の条例」に沿って建築を進めていく場合、８つの「美の原則」と、それらを具現化する 69 の言葉（キーワード・パタン）を手がかりに、建築を行う敷地が求める景観を探っていく。

➢ **真鶴町まちづくり条例「美の基準」について**

「観光旅行で訪れた歴史的なまちなみ、外国旅行でみたあの協会、そしてこどもたちと一緒に行く賑わった海、眼をつぶってそれらを思い出すと、そこにはみんなが「協力」して創ったという思いがわいてきます。

「協力」して創ったということは、そこに何等かの「共通の思い」があったということでしょう。「美の基準」は真鶴町を美しくすることによって、いきいきと生活するための「ルール」です」（「美の基準」導入より）

＜８原則＞

(1) （場所）敷地の特徴を尊重する
(2) （格付け）建物の格付けを行う
(3) （尺度）ヒューマンスケールを大事にする
(4) （調和）周囲や自然と調和する
(5) （材料）町の材料を活かす
(6) （豊かさ）独自の装飾と芸術による豊かさ
(7) （コミュニティ）コミュニティを守り育てる

(8)　（生きづく眺め）人びとが生きづく眺め

例：（7）コミュニティ

- 基本的精神：建築は人々のコミュニティを守り育てるためにある。人々は建築に参加するべきであり、コミュニティを守り育てる権利と義務を有する。
- 手がかり：コミュニティの保全、生活共域、生活環境、生涯学習
- キーワード：世帯の混合、人の気配、お年寄り、店先学校、子供の家、外廊、小さな人だまり、街路を見下ろすテラス、街路に向かう窓、座れる階段、ふだんの緑、さわれる花

コミュニティの原則とは、「建築自体がコミュニティを育まなければいけない」ということであり、「美の基準」では、世帯の混合、店先学校、小さな人だまりなどの特徴を前提条件に示している。そしてそれぞれの内容が生きづくような演出を求めている。

✧　**世帯の混合**

集合住宅をつくる時は世帯を混合させなければならないという基準。間取りや広さをさまざまにつくることで、若者、小家族、大家族などさまざまな構成となり、町全体が多様な年齢層を持つようにすることである。

（参考）「世帯の混合」について：2000 年代初頭に日本各地で起きた、ニュータウン問題のようなことを防ぐことも見据えて作られていたのかもしれない。ニュータウン問題とは画一的な建物にすることにより、単一の年齢層（同世代）の人だけが集まるという世代の偏りが生まれ、その世代に当てはまらない高齢化と子供世代が流出し、人口の減少が急激に進行することで、コミュニティが喪失してしまう問題が都市郊外部に実際に発生している。

✧　**店先学校**

地域の仕事の風景を積極的に見せる基準で、日常から学習する機会を持つこと。干物を干している風景、漁師が網をつくる風景。これは東京から来た人にとっては漁師町に来たと感じさせる風景になる。石屋も石材商品を店の奥に大事にしまうのではなく、軒先に石材を出して仕事をすることにより、石の町に来たと感じることができる。地域の仕事を積極的に見せることで、地域の固有性が発揮できるという視点での基準になっている。

✧　**小さな人だまり**

人が立ち話を何時間でもできるような、車やバイクに妨げられない空地やベンチを置いて人だまりをつくる仕掛け、空間を考える基準。真鶴町では、おじいちゃん、おばあちゃんたちもそれぞれ皆「マイ人だまり」を持っている。4、5 人のグループで、ある人はお肉屋さんのベンチだったり、ある人はお茶屋さんだったり、ある人は屋根つきのガレージが「マイ人だまり」となっている。そのような場所をつくる解決法には、「背後が囲まれていたり、真ん中に何か寄りつくものがある様につくること」とある。

これらに対する具体的な解決方法は敷地を見て決定する。敷地毎の特徴に沿った演出で最適解を探っていく。数値的な基準は敷地の空間を返って阻害する可能性もあるため、「現場を見て最適解を具体化することができる」定性的な基準により、敷地の文脈に沿った丁寧な掘り下げを行い、空間をより豊かなものにする。

5.2 作業と協議

（資料「美の基準が生み出すもの一生活景の美しさー」 真鶴町ト部直也より）

「美の基準」の作業は、まちづくり条例の届出書提出後、下記の手順で進められていく。

1　現地調査（敷地を丁寧に読む）

最初に行う敷地調査が最も重要なものとなる。敷地の文脈を読むことにより、採用する基準が導かれるからだ。敷地調査は、遠景・中景・近景の 3 段階から行われる。

1.1　遠景調査

任意の地点で遠方から見た敷地の見通しを確認する。東西南北全ての方角から確認し、景観協議において優先する方角（敷地が見通される方角）を確認する。敷地が見通されないことも大事な確認点となる。

1.2　中景調査

敷地周辺に美の基準につながる資源があるか確認する。道祖神等の【聖なる所】がないか、【静かな背戸】に接していないか、みかん畑が広がっている、原生林に近い、【海と触れる場所】がある等、敷地周辺の景観資源や、装飾や格付けのモチーフや建築計画のコンセプトにつながる資源を確認する。

1.3　近景調査

敷地そのものを調査する。植生調査や土地の傾斜などを確認する。 以上の作業と敷地の歴史等を把握することで、「敷地の表情と記憶」を読み取る。

2　調査レポート及びリクエスト調書の作成

現地調査によって明らかになった敷地の特徴について、担当がレポートを作成する。レポート作成は持ち帰った資源を整理し、敷地の特徴を明らかにするために行われる。そして、整理された特徴をもとに、「美の基準リクエスト調書」（以下、調書） を作成し、具体的な要望をまとめる。レポートを参照しながら、美の基準の全ての基準に目を通し、該当する基準を選定し、具体的な要望事項を調書に記述する。敷地特性の把握とそれに基づくリクエスト内容が妥当であるかどうか、レポート及び調書をもとに庁内で確認作業が行われ最終案を決定する。ちなみに、調書の修正は、見え消しで行い、リクエストが客観化される経過を記録として残している。

3　リクエスト調書に基づく景観協議

決定された調書を建設行為者に提示しリクエスト項目全てに対して回答を求める。協議は、建設行為者からの回答が記述された調書に基づき、図面を照らし合わせながら行う。調書に対する回答提示をもって協議終了ではない。お互いの意見に対する意図の確認や、実現できない基準に対する代替案の検討、要望していない基準に対する建設行為者からの逆提案など、最適解を探し出すための議論が行われる。

（参考）真鶴町独自の景観に対する評価

- 世界デザイン都市サミット「草の根デザイン実験都市」
- 日本都市計画学会「計画設計奨励賞」及び「まちづくり学会賞」受賞
- 水彩画家の三宅克己 「日本のリビエラ」と賞する
- 法政大学エコ地域デザイン研究所 イタリアのポルトフィーノとの類似性を指摘
- 後藤春彦『生活景』

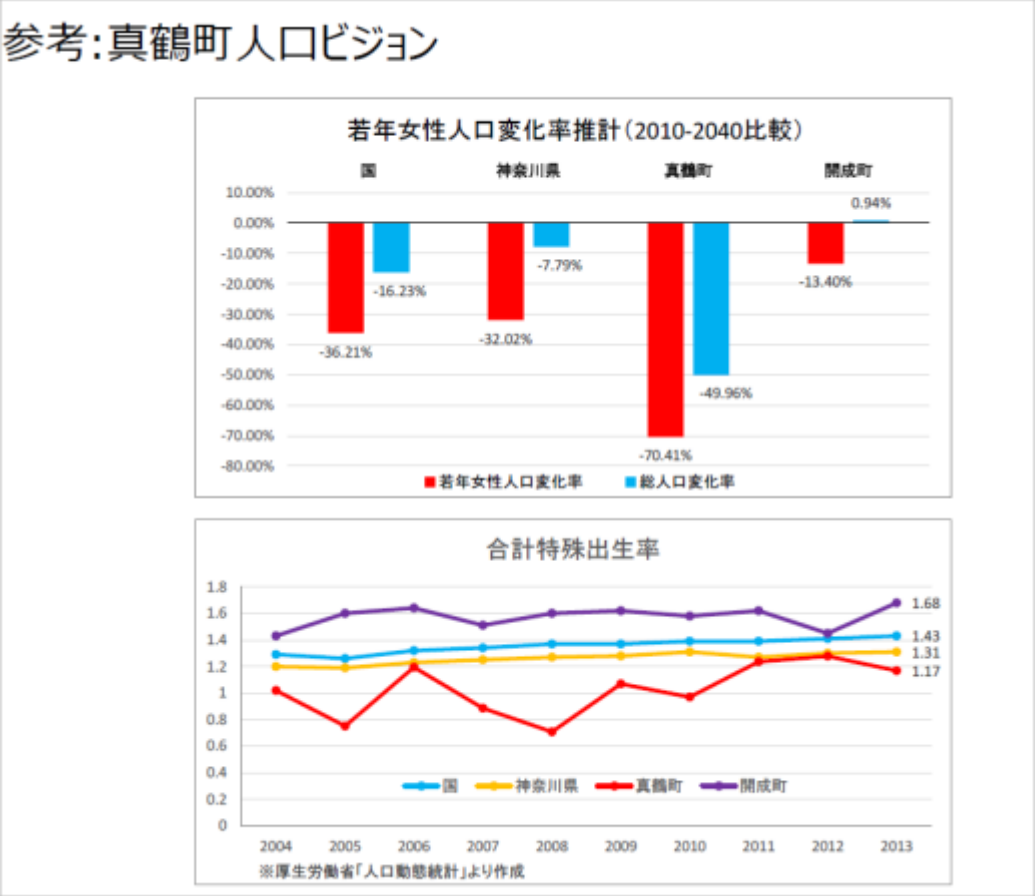
- **「美の基準」が作られた背景**

「美の基準」が施行された 1994 年は、ちょうどバブルの終焉期の頃だったが、きっかけはその前の 1987 年のリゾート法（総合保養地域整備法の通称）にある。真鶴町はリゾート法による乱開発の影響を防ぐために（詳細経緯は以下の QA で後述）、町民の生活と調和した独自のまちづくりを進めるため「まちづくり条例」（都市計画法、建築基準法に基づかない、自治法に基づく自主条例）を策定した。

6．真鶴の課題（過疎地域指定と少子高齢化）

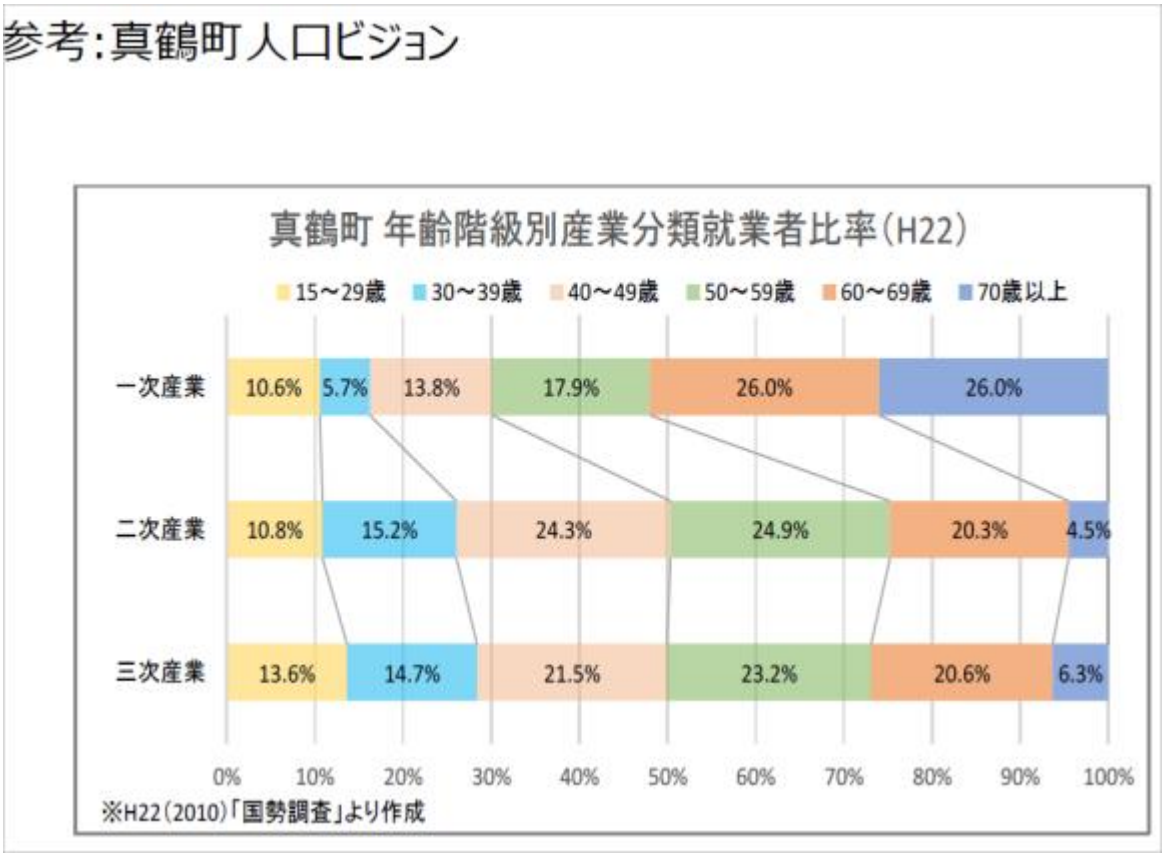
- **過疎地域の指定と若年女性人口の減少（2017 年）**

「人口減少要件」及び「財政力要件」の 2 つの要件により、真鶴は県内で初めて過疎地域自立促進特別措置法の対象地域となる。特に若年女性人口の減少が激しく、人口推移としては高度成長期の 70 年－75 年がピークで、その後ずっと微減傾向が続いている。若年女性人口の変化率が、県・国、飛び抜けて高い（赤グラフ）。

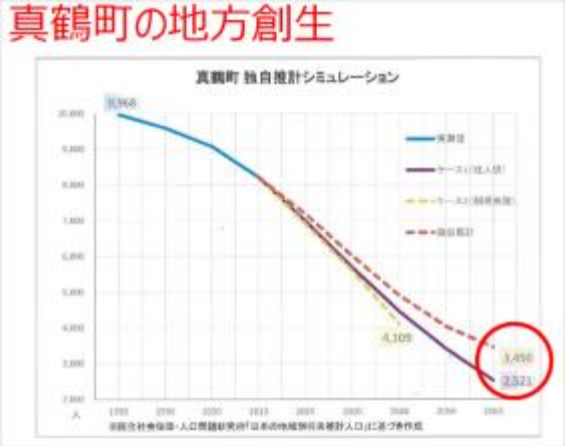


- **産業の高齢化**

産業の高齢化も激しく、1 次産業、2 次産業が、50 歳以上が半分を占める状況になっており、高齢化率、後継者不足が真鶴の課題と言える（黄緑グラフが 50～59 歳世帯）。第一次産業については、就業者全体の 52%が 60 歳以上の高齢者で、70 歳以上については全体の 26%を占めている。



- **人口シミュレーション：人口減少を前提にした地域づくり**



2060 年には、何もしなかったら 2,500 人台（紫の線）。ただし、総合的な対策を打ったとしても、2060 年で 3,450 人（赤点線）となり、あまり変化がない。この結果を踏まえ、人口減少を前提にした地域づくりを考えることとなる。

年齢 3 区分（年少人口（15 歳未満）、生産年齢人口（15 歳～64 歳）、老齢人口（65 歳以上））でシミュレーションをした。2020 年までには、いったん老齢人口が上がるものの、何とか生産年齢人口が老齢人口を上回るような活力ある人口構成を目指していくこととなり、さまざまな手を打ち始めている。

- **（真鶴の特徴）高齢化率≠要介護認定率、美の基準との関係性**

真鶴町の高齢化率は 40%を超えている。県内でも断トツに高く、真鶴と隣の湯河原町と 2 町だけが 40%を超えている（神奈川県の高齢化率は通常 30%前半）。それにも関わらず、要介護認定率は国平均、県平均より低い。つまり、元気なお年寄りが多いといえる。要介護認定率が低い背景に、坂の町で普段から足腰が鍛えられているのか、もしくは人だまりによる心の健康にあるのではないかと思ってしまう町である。真鶴は家にふさぎ込まない場所やしくみが、町中に残ってい。高齢者の方々は、例えば肉屋やお茶屋のベンチであったり、屋根のついた屋外駐車場であったり、眺めの良い階段だったり、みんな「マイ人だまり」をもっている。家にふさぎ込まない小さなつながりやたまり場がある。人間中心、ヒューマンスケール、人だまり、人の気配をつくる、こうした空間づくりが美しい、と言っているのが「美の基準」であり、それを大事にしてきたことと、低い要介護認定率はつながっているのではないだろうか。「美の基準」には一切、様式美はなく、西洋風、和風といった様式は何でもよい。ただ、窓は多く、人の気配を出すようにしたり、必要以上に大きな建物にしたりしないこと、について明言している。ヒューマンスケールを大事にすれば、個人の好みの様式はいろいろあっても、集積した風景は、何となく調和が取れた眺めができるはずだ、という考え方になっている。

この条例は 2008 年に韓国でも報じられたことで、世界各国から真鶴に視察が増えた。そして、2010 年には、韓国のソウルで開催された「世界デザイン都市サミット（デザインに力を入れている 32 都市の首長が集まり、お互いのデザイン論を議論し合う場）」にも招待されるようになる。そこで紹介したのは、格好の良い様式美のデザインではなく、普通のひなびた生活風景が真鶴のデザインであること、そしてこれが「住民がいきいきと暮らすためのデザインであることを伝えた。真鶴は世界ともつながる。

7．真鶴町活性化プロジェクト（官民連携）

後述する町の地方創生に先行して取り組んだのが公民連携の真鶴町活性化プロジェクト。2012 年の秋より、真鶴町の活性化を目指し、役場中堅・若手職員と公募等の町民メンバー、商工会等の関係団体メンバー・公募住民等によりテーマごとにチームを作り、真鶴町活性化プロジェクトを立ち上げた。「プランより実行」を掲げ、1 チーム当たり 5 万円～10 万円程度の小予算を付け、3 年間総額で 50 万円程の補助金で様々な事業や企画が生まれた。観光振興や産業振興、移住定住促進や企業連携によるまちづくり等の課題に対し、試行錯誤しながら、一つでも具体的な対策を実現すべくさまざまなプロジェクトがスタートしている。

- **真鶴なぶら市**

http://naburaichi.com/

2014 年「真鶴なぶら市」という朝市を立ち上げたプロジェクトで、現在も続いている。「なぶら」というのは、漁師言葉で、魚の大群が群をなして海面をピチピチはねている様子を「なぶらが立つ」と言う。

（内容）

・毎月最終日曜日の 10 時～13 時の 3 時間

・場所：真鶴港

真鶴産の野菜や干物はもちろん、パンや燻製、漬物など、普段は町で手に入りづらいものも購入することができる。

・運営メンバー：町民、役場職員、観光協会職員、商工会職員の有志

プライベートの時間を使って進めている。元々は行政主導だったが、今は民間事業に切り替わり、実行委員会を組織している。

（テーマ）素（す）になる。素（もと）になる。

媚びない、飾らない、自然に近い真鶴の住民（人）の「生きかた」が、この町を形成する大事な要素であり、未来を明るくする要素になる

（目的）

１）真鶴で活動をしようとする人のチャレンジや交流の場として提供し、応援します

２）地場産、手作りなど人の手から生まれたものを大切にします

３）ココロ温まる真鶴の風景を知ってもらいます

http://naburaichi.com/about

✧ **なぶら市のポイント**

１）ターゲットを観光客にしなかったこと

ターゲットを町民にしたところ、野菜中心の朝市になった。町民は鮮魚や干物を日々買っているので、朝市では野菜を望んでいた町民が実は多かった。真鶴の農業といえば、ミカンだが、実は野菜も作っていることが多いことが分かった。そうした市場に出ないような小規模農家や、趣味で作っている人、兼業農家のところへ実行委員会メンバー自身が挨拶に回り、信頼関係をつくり、自分たちで集荷し、売上の一部をお返しするというかたちで、野菜があふれる朝市になっていった。今も愛される朝市として、町民に支持されている。

2）持続可能な推進体制を取っている

無理をしない。朝市は 10 時にスタートし、たった 3 時間で終了する。これであれば、運営側も無理をせずにでき、販売側も 3 時間であっても売上げが出ているので、事業が継続するポイントになっている。

- **くらしかる真鶴：おためし移住体験（のちに町の総合戦略の事業に発展）**

http://www.town.manazuru.kanagawa.jp/tokushu/1224.html

移住対策プロジェクト。人口減少に歯止めを掛けるため、1 年間検討を重ねた。その結果、移住のハードルの障壁は「移住するか否か」の二者択一にあると考え、障壁をクリアする施策として、「真鶴暮らし」を体験する「お試し移住体験（くらしかる真鶴）」プロジェクトを立ち上げ、実行した。合計 5 組が利用し、うち 2 組が移住した。

体験者には、隣接する魚屋、肉屋、八百屋等と積極的に商店街と交流をしてもらうことで、真鶴での生活体験だけでなく、地域交流・活性化も図ることができた。この成果を受け、行政事業として本格稼働している。

「くらしかる真鶴」は、「暮らしを借りる」という意味と、町の魅力である「懐かしさ」を表現した「クラシック」を合わせた造語で、プロジェクトメンバーの町民が名付け親である。

（参考：真鶴町「くらしかる真鶴ー真鶴町お試し移住体験事業ー」，
http://www.town.manazuru.kanagawa.jp/tokushu/1224.html）

～「くらしかる真鶴」を通じて広がるつながり～

- **真鶴出版**

真鶴の情報を発信しながら、1 日 1 組限定で泊まれる場所を提供している出版社で、川口さん、來住（きし）さんという若い 2 人が経営している。2 人は「くらしかる真鶴」プロジェクトのモニタリングに参加した第 1 号の利用者であり、それがきっかけで 2015 年に移住、「真鶴出版」を立ち上げた。

川口さんが出版業を、來住さんはゲストハウスを運営している。「真鶴出版」の特徴は宿泊ゲストには 1～2 時間一緒に町案内する「町歩き」をつけていること。普通に来ただけではわからない真鶴の魅力や、町民の紹介を直接行っている。

- **ピザ食堂 KENNY**

真鶴出版の移住等がきっかけで、「ソトコト」の 2015 年の移住特集の表紙と巻頭ページに真鶴町が取り上げられた。ソトコトを見たさらに若い 20 代の夫婦（向井さん）が 2016 年 6 月に移住し、小さな食堂で「ピザ食堂 KENNY」を開店した。夫婦は半年間の仕込み期間中に地元住民と付き合い、干物ピザや、塩辛のパスタ、目の前のお肉屋さんのお肉を使ったハムピザなど、地元の素材での新メニューを開発している。

（ト部氏）

昔の移住者は、「別に地域と付き合わなくてもいいや」という方が多かった。しかし、今の移住者の人達はまったく逆で、ローカルを知っていきたい、という思いが強い。SNS の影響も大いにあると思うが、地元を開拓し、自分だけが知っている真鶴をどんどん発信したい思いがあると感じる。

- **酒屋：草柳商店**

真鶴町には「角打ち（酒屋で酒を買ってそのお店で飲むという昭和の風習）」が残る酒屋がある。16 時位には漁師が、18 時、19 時になると、商店街の干物屋や寿司屋の人達が飲みに集まるので、ここに来れば必ず地元の真鶴人と会えるので、移住者が地元の人と交流する入口になっている。

酒屋の家族は、人と話すことが大好きな女将さんと店主である息子のシゲさん。シゲさんは昔ロックをやっていたのでノリがいい。明るい家族が営んでいるから、余計にみんなが入りやすい。ここは地元の人と移住者がつながる場になっている。

- **干物屋**

草柳商店の常連客の干物屋さんは、地元でも独立独歩、他人に頼らず自分自身で干物仙人になるべく日々修行中。ところが、草柳商店で知り合った移住者が干物を買いに行くようになると、移住者が次々と他のお客さんを連れてくるようになった。そうなると、干物屋の店主自身も移住者に対して心を開きはじめ、今や店主自身が移住者交流会を主催するまでになっている。

役場の紹介や公共施設で地元の人と移住者がとつながるのではなく、移住者が地元のお店に行ったり、交流会に参加したりすることで、地元町民とつながる環境が生まれている。

- **スタートアップウィークエンド真鶴**

スタートアップウィークエンドとは、いわいるハッカソンのことで、週末の金、土、日 3 日間だけでアイデアをカタチにするための方法論を学び、スタートアップ（起業）の過程を体験するプログラムである。実際にサービスを見えるカタチに実装し、顧客獲得にまで挑戦してもらう場でもあり、「町村レベル」としては日本で初めて誘致に成功し、真鶴で開催した（2014 年）。スタートアップウィークエンド自体は、アメリカのシアトルから始まり、これまで世界 150 カ国以上、1,200 都市以上で開催されている、世界的規模のスタートアップイベントであり、週末に優勝したチームが世界大会に進出できるワールドバトルでは、真鶴の優勝チームが、部門別で世界第 2 位という結果をもたらした（The Disruptors & Big Ideas トラック部門）。チームの中のアメリカ人と真鶴の若者が今、来日した外国人と地域のディープでローカルな人や企画・イベントをつなげるインバウンド WEB サイト等を稼働させ、起業パートナーになって事業を立ち上げている。

世界的イベントのスタートアップウィークエンドの開催誘致の反響は大きく、第 1 回の開催でも目標 20 人のところ、22 名集まり、これをきっかけに真鶴と全く縁のなかった IT コミュニティとのつながりが生まれた。そして、回を重ねるごとに“真鶴バージョン”としてカスタマイズしている。例えば、開催場所は、当初、東京にあるようなきれいな情報センターで開催していたが、「それでは真鶴に来た気がしない」ということになり、港にある小さな倉庫にあえて移り、「ガレージからスタートアップ！」の世界で開催している。大空の下で干物を食べてからパソコンに向かうという、真鶴らしい「漁師町ハッカソン」にカスタマイズしている。真鶴テイストにするのも真鶴町民の気質であり、力でもある。

- **クリエイターズキャンプ**

スタートアップウィークエンドがきっかけで、そのコミュニティからの紹介で東京の音楽プロデューサー、ジャニーズ事務所のディレクターだった人ともつながるようになる。彼ら自身も創作活動ができる環境の良い場所を探していた。真鶴は東京から近

く、風景も残っていて、しかもハッカソンの開催地ということで、興味を持ってもらった。「美の基準」を説明、岩地区のひなびた風景（岩海岸）を見た上で、「ここで創作したい」ということで話が合意し、民宿に分宿して、作曲制作が始まった。クリエイターズキャンプ自体も 5 回ほど開催し、プロの作曲家のほか、映像クリエイターも訪れるようになっている。発表会には審査委員等で、現在大活躍している著名な作曲家やソニー・タワーレコードの担当者が来ているので、「メイドイン真鶴」の作品でメジャーデビューする道が開かれる仕組みになっている。

８． 町民による「新しい人の流れ」づくり：芸術祭　真鶴まちなーれ

（左：真鶴町育ちの大学の先生、両サイドが真鶴育ちの大学生、右から 2 番目が地元の主婦）

- **芸術祭　真鶴まちなーれ**

「美の基準」の 20 周年にあたる 2014 年に不定期ではじまった、町民主体によるアートと交流を楽しむプロジェクト。実行委員会には地元住民の有志に参加してもらい、町民による「新しい人の流れ」づくり事業（真鶴まちなーれ）として立ちあげた。期間は春休みを使った、３週間ほどのイベント。

１年目は空き家を使い、８名による現代アートを町内に点在設置させて、来場者は作品を見つつ、真鶴の風景を楽しんでもらうというコンテンツにし、2 年目からは町民が来訪者に真鶴町のことやアートを紹介するツアー形式に変えた。

ツアーの中で地元の町民と来訪者が直接会話をしながら、地元の人しか知らない情報を聞くことで、今ではより深く真鶴を知ってもらう事業に育っている。

また、昔「真鶴銀座」と呼ばれたシャッター街をアートで復活させようと、空き店舗にアート作品を置いたり、ワークショップや映画の上映会を開催したりしている。アートで真鶴に来る流れと、町民自身がアートで楽しむ日々を過ごす事業が展開されている。

９．真鶴町の地方創生の柱（真鶴町総合戦略基本目標）

１）仕事をつくる

２）新しい人の流れをつくる

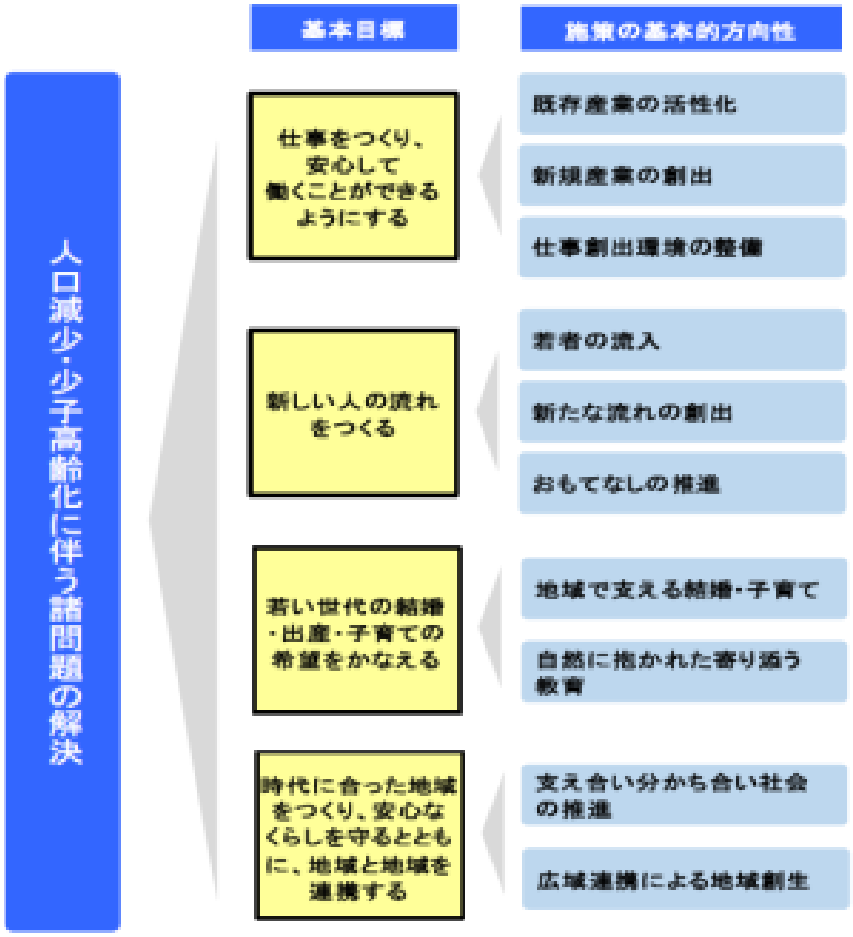
３）若い世代への結婚・出産・子育て支援

４）安心・安全なまちづくり

地方創生戦略として、真鶴町ではこれら４つを柱に置き、「真鶴町らしい地方創生」を実現することを目指し、さまざまなしかけを展開している。なかには、前述の活性化プロジェクトから総合戦略の事業へと発展した、「くらしかる真鶴」の活動もある。

「４つの基本目標は相互に密接な関連性をもつことから、一体として対応することが不可欠です。そのためにも、「新たな魅力を発信し人の流れをつくる」ことにより「交流人口を増加」させ、「安定した雇用を創出」し、「安心して子育てができる町」をつくり、「安心な暮らしと地域連携」を目指していきます。真鶴町には豊かな自然に抱かれた暮らしがあります。その魅力を最大限活かすことで「真鶴町らしい地方創生」の実現することを目指し、「御林といきていく町・真鶴」を掲げ、基本目標を達成します」
（真鶴町総合戦略基本目標,P28,
http://www.town.manazuru.kanagawa.jp/material/files/group/12/sennryaku.pdf）

総合戦略政策体系図　総戦　30p



- **地域再生計画：新産業の力「岩牡蠣養殖」（日本初の完全外洋養殖の可能性）**

今、一番芽が出てきている核事業が、岩牡蠣の養殖事業。日本初の完全外洋養殖での生産を目指し、試験養殖を重ねたところ、確実な生育が確認された。岩牡蠣養殖については、先駆自治体である島根県・海士町との包括的広域連携協定を締結し、強力な地域間連携のもと推進している。

- **真鶴テックラボ**

活性化プロジェクトで取り上げた、スタートアップウィークエンドでは、実際に専門知識をもったエンジニアやデザイナーが起業にチャレンジする場になっている。しかし、真鶴の町内の漁師、農家、石材加工の人びとも広く捉えれば、エンジニアという領域に入ると考え、敷居を低くしながらも同じように誰でもが創作チャレンジができる場として整えたのが、「真鶴テックラボ」。

港にある古い割烹料理店を必要最低限で改修し創作拠点施設として稼働させている。施設の中は 3D プリンターやレーザーカッターをはじめとしたデジタルファブリケーションの工作機械や、サウンドブラスター、手づくりで石を削るような機械、T シャツプリントもできる機械をそろえている。

昨年度はキッチンを工事して使えるようにして、レンタルキッチンとして食ラボを追加で併設した。デジタルからアナログ、食まで開発できるような施設になっている。「真鶴テックラボ」は、基本的にはインキュベーションセンターの役割と位置付けている。6 カ月間という使用期間の間に、「なぶら市」で町民に顔を覚えてもらったりしながら、顧客をつけ、テストマーケティングを行い、本格起業する仕組みになっている。

実際、パン屋を目指し、食ラボを一年間活用して移住した若い夫婦がいる。販売も好調で、今年 5 月に卒業し、独立開店する準備に入っている。「真鶴テックラボ」はコワーキングスペースを兼ね備えているので、異業種交流でお互いの横のつながりが生まれたり、お互いが出会わなかった顧客を結果として紹介し合ったりする効果があり、IoT やウェブマーケティングの会社がサテライトオフィスを構える動きもできている。

「真鶴テックラボ」の運営は公設民営で、行政で改修工事をし、運営は観光協会に貸し付けしている。おそらく、観光協会がファブラボを運営しているのは、日本ではここだけだろう。これだけでもメッセージ性があるだろうが、「ものづくり観光」としても打ち出している。

- **鶴半島イトナミ美術館**

2017 年に立ち上げたプロジェクト。かたちある美術館をつくるのではなく、「暮らしに息づく真鶴町の美しさ」をウェブで伝えていくソフトの美術館。マガジンハウス社とコラボして、同社の「colocal」というウェブマガジン上で「真鶴半島イトナミ美術館」として開館、30 本ほどのコンテンツを観ることができる。

内容は、真鶴町の暮らしを彩る「人」「場所」「営み」といった作品（＝大切なもの）について、２つの方向の切り口から紹介している。

１）真鶴ものがたり：御林や貴船まつりといった町が大切にしてきた自然や営み

２）町民アーティスト：「ものづくりは美しい」をコンセプトとして、「生命（いのち）の画家と呼ばれた」中川一政画伯をはじめ、想いのこもったモノづくりに精を出す町民などを紹介。例えば、３店舗ある干物屋はそれぞれ味付けが違うことや、三姉妹のような親子が経営する創作料理の民宿、陶芸家、草の根企画が次々に生まれ、人だまりができる酒屋などが掲載されている。

半島全体に広がる町民アーティスト（面白いコンテンツ）を紹介することで、サイトを見たアート好きな人、クリエイターに興味を持ってもらい、真鶴に来てもらう流れをつくっている。実際に若い建築家夫婦がこのサイトを見て真鶴に魅せられ移住したり、映像作家も家族５人での移住を決めたりしている。また、地元の飲食店からは、「サイトを見てお店に来た人がいる」、「明らかに若い客層が増えた」、との報告も届き、ようやく人の流れが出はじめてきている。

「美の基準」を残した風景があるから、この風景を活かして「創作で真鶴に来る」流れが出てきている。後述するサテライトオフィス誘致もその一連の流れになっている。「良い環境で創作する」から、「良い環境で働く」ことで真鶴町を価値化するサテライトオフィス誘致に着手している。

- **サテライトオフィスの誘致活動**

サテライトオフィス誘致の元祖・徳島県神山町を超え、全国一の誘致実績を誇る同県美波町の株式会社あわえに真鶴町での実現可能性について調査を実施した上で、同社が支援として主催する自治体と企業をつなぐマッチングイベントに数回参加。PR タイムでは、「おらが町自慢」ではなくて、真鶴町が抱える雇用（人口減少）課題を提示し、共に解決したいパートナーを探していることをアピールした。

真鶴町が抱える雇用（人口減少）課題を共に解決する企業・団体とのマッチング：

起伏に富んだ坂の町であるため、大型工場の誘致などが難しく、雇用の場が限られている。真鶴町は、若年世代が町外へ出ていくことに長年頭を悩ませていた。サテライトオフィスという一つの新しい働き方を提示することで、若者世代が真鶴町でいきいきと働いていける環境を増やし、町外への人口流出を少しでも抑えられればと考えている。

１）女性が能力を活かして働ける環境

真鶴で働き口と言えば役場やスーパーのパート位しかない。転入者は毎年 200 人程度いるが、結婚、介護、転勤といった本人の意志に関係のない移住者が大部分であり、東京で色々キャリアを積んでも能力を活かして働ける場所が真鶴町にはない。そこで、女性がイキイキと働ける環境を提供してくれるような企業・団体の誘致を望む。

２）真鶴の漁業や石材を高度化できるような企業（IOT 企業、ウェブマーケティングやブランディング）

真鶴周辺の海は岸近くから急に深くなる「どん深」の海。港から 10ｋｍほど沖に出ると、水深 1,000mもの深海になるため、暖水性から冷水性、回遊するものから海底に棲むものまで多様な魚介類に富む豊穣の海となっている（真鶴のさかなはなぜ美味しいの？,https://www.manazuru.net/m_gyogyou/）。こうした資産を活かせるように、水中ドローンや、水質管理システム等の IOT 企業、ウェブマーケティングやブランディングできる会社等、地場産業（漁業、石材業、農業、観光業等）を高度化できる会社を希望している。

３）「美の基準」を利用して価値化していけるような企業

町内に増加する空き家を、美の基準で再生・価値化できるような会社等を求めている。

＜サテライトオフィスを誘致した企業・団体＞

- **ウェブマーケティング会社**

女性が能力を活かして働ける環境を提供している。スマホでも仕事が可能であるため、小さな子どもがいる家庭の母親でも仕事を受注することができる。

- **結婚相談 NPO**

真鶴町の人口減少を改善するために、真鶴町に結婚相談及び婚活事業の拠点を展開している。

- **コミュニティ真鶴**

「美の規準」でつくった建物の第 1 号。サテライトオフィスの体験オフィスとしても使える。結婚相談 NPO は、年に 10 日以上ここを拠点するような循環型サテライトオフィスを開設し活動している。このような常駐型ではない誘致も始まっている。

＜真鶴町としての独自性：リーン・スタートアップ・タウン＞

サテライトオフィス誘致において、「自然豊かな環境」はどこの誘致市町村でも謳っており、差別化にならない。真鶴の独自性として形成されつつあるのは、一般的な創業支援システムと共に、地域課題を解決する新規事業立ち上げに必要なエコシステム「リーン・スタートアップ・タウン」である（詳細は後述）。町はその環境を生かして、女性活躍や地場産業再生に取り組む企業を誘致し、一緒に課題解決をしていきたいと考えている。

10.次々と町民事業が生まれている理由～リーン・スタートアップ

＜リーン・スタートアップ＞

シリコンバレーで定式化されている新規事業開発のマネジメント理論

スタートアップの場合、従来の市場ではなく、新しい市場を生み出すため、予測がつかない分野に対しての起業となる。従来型の起業のやり方は、市場調査を経て、事業計画を作り、お金を投資する。しかし、結果はゼロだった、という場合もある。リーン・スタートアップは、考えた内容のプロトタイプをいち早く作り（小さく始め）、市場に投入し、お客さんの反応をみて、修正し続ける。顧客の反応により、次の進むべき道を見つけていく新規事業立ち上げのマネジメント理論。失敗を学びに変え、PDCA を素早く回すことがポイントである。

・リーン・スタートアップの考え方の良い点

この考え方の良い点は、失敗に強いところにある。通常は、失敗すると「自分は悪くない。相手が悪かった」というパターンと、「自分が悪い」と打ちのめされて終了するパターンがあるが、リーン・スタートアップの場合は、手がけていることは修正前提のスタートであり、失敗は、改善点は何かを探す行為につながる、という考え方であるため、失敗からの学びを自分だけで終わらせず、継続できることにある。

・エコシステム「リーン・スタートアップ・タウン」の形成～創業支援システム＋リーン・スタートアップ

最近では、多くの市町村でもいわゆる創業支援システムの仕組みが整備されてきている。真鶴町でも創業支援事業計画を策定し、商工会や地元金融機関、さらに真鶴町には「真鶴未来塾」という創業支援団体が連携して、創業者に対して講座を開いたり、補助金申請支援や融資をしたりする仕組みがある。

真鶴町では、創業支援システムに加えて、独自に形成しつつあるのが、この「リーン・スタートアップのエコシステム」である。リーン・スタートアップを使い、起業一歩手前のサポートシステムとして、また、自分のアイデアが顧客や市場に受け入れられるのかを検証する環境が真鶴町として独自に形成されている（後述参照「パン屋 秋日和」のリーン・スタートアップ事例）。

そして、これまで紹介した、自分のアイデアをデザイナーやエンジニアの力を得て実装できる「スタートアップウィークエンド」、実際にアイデアをデジタル工作機械等でモノにすることができる「テックラボ」、そして、実装したサービスやモノを朝市「なぶら市」といった場を使い、テストマーケティングすることもできる。

・真鶴の独自性につながっている

サテライトオフィス誘致において、真鶴の独自性として形成されつつあるのは、一般的な創業支援システムと共に、地域課題を解決する新規事業立ち上げに必要なエコシステム「リーン・スタートアップ・タウン」のしくみである。その環境を生かして、女性活躍や地場産業再生に取り組む企業を誘致し、一緒に課題解決をしていきたい。

実は、「なぶら市」も、「くらしかる真鶴」も、「まちなーれ」も、最初は失敗を経験している。「まちなーれ」は、顧客（町民や観光客等の来場者や、運営仲間）の厳しい声に向き合い、２回目には大幅に組織を変えた。また、町中に点在する作品を自由鑑賞式からアテンド型ツアー形式にすることでお客さんの満足度が大きく変わった。プロの経営家でも企業でもない町民事業の場合、先を読めない場面に多々直面する。だからこそ、アイデアをすぐ実装して形にして、お客さんの反応を浴びてあるべき修正を加えていく「リーン・スタートアップ」のやり方が適している。上記で紹介したすべての事業は「リーン・スタートアップ」で立ち上がった後も継続し、町も元気になりつつあることを実感している。

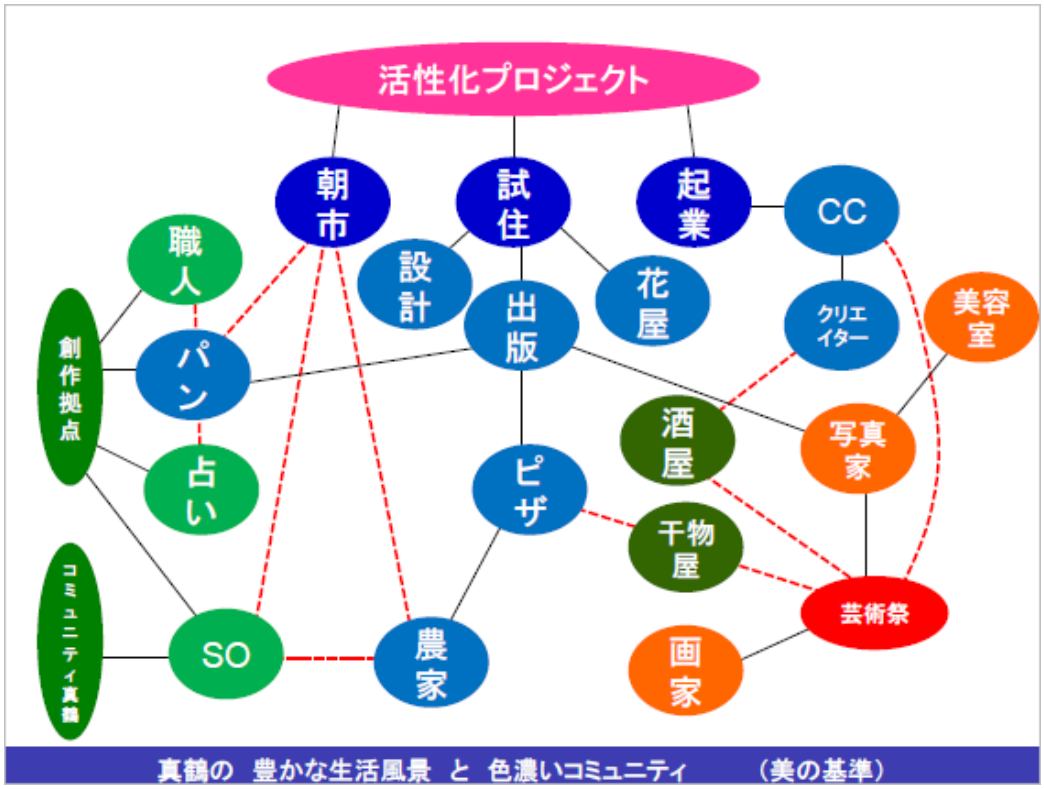
・「パン屋　秋日和」のリーン・スタートアップ事例

１）テックラボのレンタルキッチンに入居し、スモールスタート。

２）テックラボの玄関の一角や「なぶら市」で１年間出店、テストマーケティングしつつ顧客を開拓。テックラボメンバーのアドバイスやテストマーケティングでの顧客の声をもとに商売を修正。

３）半年を経てテックラボを卒業。実店舗での開店に向け、商店街の空き店舗で開店準備中

10.1. 「人が人を呼ぶ」つながりと化学反応



活性化プロジェクトで、真鶴町の多様な入り口と、「人が人を呼ぶ移住」、
そして入り口後に起こる様々な化学反応の図

- ✧ くらしかる→真鶴出版→ピザ屋→奥さんが妊娠→親友代打→農業従事希望→オリーブ畑を一緒に経営
- ✧ スタートアップウィークエンド→クリエイターズキャンプ（ミュージシャン、デザイナー、プログラマーなどさまざまなジャンルのクリエイターが真鶴に集い、新しい価値やプロダクトを生み出すイベント）→参加者クリエイターが移住→クリエイターが地元の酒屋の主人をユーチューバーに仕立て、YouTube で草の根情報を発信→酒屋が人のたまり場となり、新しい草の根企画が次々と生まれる
- ✧ 真鶴まちなーれ→参加アーティストで、画家の方が移住。来場客の有名写真家との出会いを通して、青山・表参道でヘアスタイリストをされている方が月一真鶴で出張ヘアサロンを開店している（真鶴の床屋の従業員として）。
- ✧ さまざまなパートナーとつながり、化学反応を起こす。コミュニティ真鶴、テックラボを通して企業がまちづくりのパートナーになりはじめている。活性化プロジェクトや創作拠点施設、コミュニティ真鶴、芸術祭（真鶴まちなーれ）といった新しい人の流れ事業、様々な入口が真鶴に生まれている。入ってきた後は違う所とつながり、連携パートナー、ビジネスパートナーになっていく。いろんな主体が縦横無尽につながり、化学反応が起こっている。

11. まとめ

人口減少、働く場づくり、活気、環境保全問題、認知度、ブランディングというのは、従来は行政がやってきたが、今は民間事業、もしくは町民事業が解決していくという現象が起こってきている。むしろ、そういった場づくりをしていくのが行政の今後の仕事になるのではないかと感じている。

- **共通していること – どれも風景を大きく変える必要がない**

これまで紹介事業はノンジャンル、多様な分野にまたがっているが、1 つ共通していることは、全て風景を大きく変えなくて良いこと。東京とは違う風景が残っているから真鶴に人が来ている。スタートアップウィークエンドも、なぶら市も、大きな建物を建てる必要はない。そういう意味で言えば、「美の基準」で守った風景を価値化していくことが、町を元気にする事業とつながっている。この風景を残すことで住民が潤う状態に持っていかないと、「美の条例」もこうした民間事業も根づいていかない。そこをどうやって住民の生活につなげていくかが一番大事にしているところである。

12. 視察時のようす

＜サテライトオフィス誘致のオフィス、くらしかる真鶴＞

・１Ｆ手前：サテライトオフィス誘致のオフィス、奥と２Ｆがくらしかる真鶴として利用できる（駐車場あり）

・運営は行政

・コンシェルジュ専従職員：遠藤氏　（岩地区出身、真鶴まちなーれの２回目から関わっているおり、現場について詳しい。土間の部屋の使い方は遠藤氏に一任されている）

・物件は町民からの寄付。来訪者の対応、官民連携の会議オフィスとしても使っている（見える化）。

（左）２Ｆ：くらしかる真鶴

（右）商店街の並びには生鮮（お肉屋、魚屋、八百屋）が揃う店舗がある。お試し暮らしの時に商店街に挨拶にいってもらう。

＜美の実験（コミュニティセンター）＞

「美の条例」の見える化として、条例施行と同時に補助金を使わず、建設した。行政でコミュニティセンターを運営していたが、住民運営に切り替え、住民協議会の建物となっている。住民による運営が難しかった中で、経営手腕のある一般社団法人「まなづる未来塾」が事務局として運営を担っている。

・まなづる未来塾（奥津氏）

元役場の職員（IT インフラ敷設）、創業支援事業をはじめ、さまざまなコミュニティを作っている。スタートアップウィークエンド、クリエイターズキャンプなどをバックアップしながら、コミュニティセンターの運営も行っている。

- ヒューマンスケールを大事にする
- 一番いいところに建物は建てない、みんなが話せる空間に
- 人の気配がするように窓がふんだんに使われている。
- （右上の上側）海の玉石
- （右上の下側、左下）小松石（墓石を作る時にでる端財で：素材を活かす）
- （右下）企業の貸しオフィスとしても使える場所もある（クレディセゾンや NPO）

＜至るところにある、背戸道（せとみち）＞

家の裏手にある道。家と家との間にある人の気配のする路地。町並みや風景が息づいている美の町「真鶴」ならではの散策路。

「美の基準」－キーワード：静かな背戸（前提条件）より

真鶴のイメージを一層引き立てているもののひとつに、静寂な場所「静かな背戸」がある。細い裏道でつながれた山際の背戸は、とても静かに人を迎えてくれる。また斜面の起伏沿ったり、よぎったりするこの背戸は、微妙な光や風景を演出してくれる。賑わいの中や、人だらけの喧噪の中で働く者にとって自然な状況で静かに散策できる場所は魅力的である。

以上